

- 75 ベオグラードではクロアチア・ブロックのもう一人の幹部のマツコ・ラギーニャが彼らと合流した。ラギーニャは1920年にクロアチア総督を務めたクロアチア同盟の幹部であり、セルビアの政治指導者の間でもよく知られたクロアチア人政治家であった。
- 76 ところで、このころ、ダヴィドヴィッチ派との交渉を進めるラディッチらの方針に対して、クロアチア・ブロック内ではクロアチア権利党の代表が異議を唱えた。11月18日のクロアチア・ブロック中央委員会で彼らはこう主張した。クロアチア問題はクロアチアの国権を前提とする「国際問題」であって、それはクロアチア議会代表とセルビア議会代表との国家間交渉によってのみ解決が可能である。したがって、ラディッチが進めているセルビア国内の一部の政治指導者との話し合いは意味がない。彼らは、クロアチア権利党はダヴィドヴィッチ派やセルビアの野党指導者との会談には参加しないと表明した。ラディッチは、クロアチア権利党が突然反対を唱えだしたことに激怒した。彼は、その背景には、ウィーンやブダペストに亡命していた旧オーストリア＝ハンガリー帝国軍のクロアチア人将校の勢力と結託しようとするグループがクロアチア権利党内で影響力を強めていることがあるとみていた。ラディッチは、クロアチア権利党指導部はクロアチア人の政策ではなく、外国の政策を遂行しようとしていると非難し、クロアチア権利党をクロアチア・ブロックから除名することを中央委員会に提案した。これは採択されたため、クロアチア権利党の代表（ヴラディミール・プレバグ、アンテ・パヴェリッチ、アウグスト・コシュティッチ）は会議を退席した。11月25日、ラディッチはクロアチア・ブロックの議員会議でクロアチア権利党の除名理由をこう説明した。「(彼らの主張である)クロアチア人ラジカリズムが障害だったのではない。障害であったのはフランク派だ。彼らはクロアチアの政策に発言権はない。クロアチア人はクロアチアの中に頭をもっている。けっしてブダペストやウィーン、ローマに頭をもっているのではない」(Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.302-303)。
- 77 ラディッチの発表によれば、この政府はただちに選挙の告示をおこなう。この政府は、イタリアおよびハンガリーに対しては、友好的ではあるが断固とした態度をとる。またこの政府にはクロアチア・ブロックの代表は入閣しないが、クロアチア、ダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの地方行政機構を改革するという課題をもつ (ibid., p.303)。
- 78 Ibid., p.304. スラヴォンスキーブロードの首脳会談が中止になった決定的要因は、国王アレクサンダルの意向であった。アレクサンダルが側近に示したメモによれば、彼は、クロアチア・ブロックの議員が議会に来て国王に忠誠を誓えば、パシッチ政府に辞職を迫り、ダヴィドヴィッチを首班指名するつもりでいた。ただし、これには前提条件があった。それは、クロアチア・ブロックがヴィードヴダン憲法にもとづく秩序を全面的に認めることであった。これは、憲法修正どころか、クロアチア・ブロックのいかなる要求も認めないことを意味していた (ibid., p.304-305)。
- 79 クロアチア・ブロックにとって、その政治的目的や利益を達成するためには、プロティッチよりもダヴィドヴィッチを主要な交渉相手とする方がはるかに好都合であった。その理由は、第一に、ダヴィドヴィッチは、将来のセルビアークロアチア関係や

国家制度について事前に条件を付けたり、申し合わせをおこなうことなく、政権打倒のために、クロアチア・ブロックの協力を求めていることであった。これに対して、プロティッチは独自の憲法案を基礎に、憲法修正について事前に協定をおこなうことを求めている。しかし、クロアチア・ブロックにとって、当面必要な事柄は、現在の政権が打倒され、これに代わってリベラルな政権が誕生することであった。彼らは、そのもとで自由選挙をおこない、勢力を拡大した上で、より有利に交渉を運ぼうと考えていた。したがって、プロティッチと事前に協定を結ぶことは避けたかった。第二に、政権打倒はダヴィドヴィッチと手を結ぶ方がはるかに容易であった。ダヴィドヴィッチが決起し、民主党が分裂すれば政権はすぐに崩壊することが見込まれたからである。これに対して、プロティッチは急進党の中では少数派であり、政権に対する影響力は小さかった（以上、*ibid.*, p.305-306）。

80 *Ibid.*, p.307.

81 *Ibid.*, p.308.

82 *Ibid.*, p.309. この手紙の中でラディッチは自らの見解をこう述べた。クロアチア・ブロックは議会主義の原則に立っている。しかし、国民議会の議員の多数は強権と腐敗を特徴とする現在の政権を依然として支持している。したがって、この形勢を逆転させるもっとも確実な方法は、議会の外で協定実施の手段を準備し、民族政策および社会政策に点で進歩的な見解をもつ自由主義的で道徳観のある勢力が議会で優勢になることを目指すことである。…それゆえ、最適の方法を述べたい。ゼムンでもベオグラードでもよい。一刻も早く（反対勢力の）首脳会談を開き、進歩的な民族政策および社会政策をもつすべての野党指導者が協定を締結するための方法を一緒にさがすことである。この協定が成立すれば現在の政権は自ずと崩壊していくだろう（*ibid.*, p.310）。

83 *Ibid.*, p.311.

84 *Ibid.*, p.314-315.

85 *Ibid.*, p.316-317.

86 *Ibid.*, p.317.

87 それゆえ、立法委員会での議論は、主として民主党議員同士の間での非難の応酬となった。その当事者の一人であるダヴィドヴィッチ派のパヴレ・アンジェリッチは、プリビーチェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の議員では民主主義の理解の仕方に相違があることを指摘し、こう述べた。「私は民主党の議員として、また民主党総務会のメンバーとして、この規定が民主党の側から提案されたという発言を否定する。この前の委員会審議でのプリビーチェヴィッチの発言は民主主義にもとるものである。プリビーチェヴィッチは、メッテルニヒ公爵の政治学校で訓育を受けた人物のようだ。彼は、スヴェトザール・マルコヴィッチの政治学校で訓育を受けた我が国の政治家とは異なる人物である。我が国の政治家は進歩的な思想の持ち主であるからだ。彼がこのような規定を求めるのは驚くにあたらない。それは、これこそが権力の座にとどまる方途だと彼は考えているからだ」。これに対して、プリビーチェヴィッチ派のイヴォ・マティッチはこう述べた。「決定は党の議員クラブで下されており、あなたはこれを遵守しなければならない」。しかしながら、アンジェリッチはこう反論した。

「メッテルニヒ公爵の政治学校で訓育を受けたような方々がおこなった決定に私は拘束されない。このような規定が法律として委員会で採択され、議会での採決に付されるとしたら、立法委員会の委員であることに恥辱を感じる」。イヴォ・マティッチはこう野次った。「では民主党にとどまることにはあなたは恥辱を感じないのか」。アンジェリッチはこう切り返した。「民主党はプリビーチェヴィッチ兄弟やあなた方が代表する党ではない。このような規定を了承した決定に私は恥辱を感じるし、このような決定をおこなった党が民主主義の党を名乗らないように、そのような主張と提案をおこなった者が民主主義者ではなく、反動政治家と呼ばれるように全力を挙げるつもりだ」(ibid. p.318)。なお上述の文章の中に出てくるメッテルニヒ公爵 (1773-1859) はナポレオン戦争後にウィーン会議を主導したオーストリア帝国の首相であり、警察と検閲で自由主義運動を弾圧したことで有名であった。またスヴェトザール・マルコヴィッチ (1846-75) は19世紀半ばに活躍したセルビア最初のマルクス主義の思想家である。セルビア人を含めたバルカン諸民族の解放のためには、民主的なバルカン半島の統一が必要であると主張し、ニコラ・パシッチなど急進党の創設者を始め、セルビアの政治指導者に大きな影響を与えた。

- 88 Ibid., p.319. パシッチはこう述べた。「我々の連立パートナーは、憲法を変更しようとしているのか否か答える義務がある。民主党がおこなっているクロアチア・ブロックとの交渉は連立関係と祖国にそむく許し難い行為だ。…我々のはもはや我慢することができない。これには決着をつけなければならない。ザグレブから知らせが入っている。敵は、国家保護法を廃止し、共産主義者を議会に呼び戻そうともくろんでいるとのことだ」。しかし、これを聞いたクロアチアの民主党員は、この噂を断固として否定するようにダヴィドヴィッチに求めた。以上、ibid., p.319。
- 89 Ibid., p.319-320. 民主党の閣僚は自党の議員クラブでの議論が決着するまで辞表の提出は待つてほしいと述べたが、急進党の閣僚はこれに反対し、ただちに辞表を提出することを求めた。
- 90 Ibid., p.320. 内閣の総辞職に際し、パシッチは国王の理解を得ようと努めた。パシッチは辞職の理由を国王に次のように説明した。このたびの内閣の辞職は議会政治の危機によって不可避的になった。これは民主党が分裂し、その一部のグループがこれまでの政策を放棄したことによって引き起こされた。その結果として、政府の政策は(ダヴィドヴィッチ派の議員の反対によって)議会で阻まれている。さらにパシッチは、ダヴィドヴィッチがクロアチア・ブロックに対しておこなっている交渉の危険性、とりわけクロアチア共和農民党との協定が成立した場合の危険性を、国王に強く訴えた。なぜなら、クロアチア共和農民党は単一国家制度を否定し、連邦制に基づいて国家を構成することを求めているからであった。以上、ibid., p.320。
- 91 Ibid., p.321, Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.106.
- 92 Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.106.
- 93 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.322. 他方、ダヴィドヴィッチらは、自分たちの活動の成果として、分離独立主義者のクロアチア権利党との関係をラディッチが断ったことを強調した。

- 94 Ibid., p.322-324 なおこの日の総会には11名の議員が欠席していた。全議員が出席していたとしたら、決議案の採決における賛否の差は変わっていた可能性があった (Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.107)。
- 95 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.325.
- 96 Ibid., p.327.
- 97 Ibid., p.327-328.
- 98 Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.108.
- 99 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.328.
- 100 Ibid., p.329.
- 101 Ibid., p.331. 後年、プリビーチェヴィッチが語ったところによれば、「国王は明らかにパシッチと談合し、民主党を政権から排除しようとした」のであった (Svetozar Pribičević, Diktatura kralja Aleksandra, Beograd, 1953, p.146)。